

『海やまのあひだ』を読む ——〈折口学〉の相貌——

長谷川 政 春

一 はじめに

大正元年（一九一二）八月十三日、数え年二十六歳の中学校の青年教師折口信夫は、生徒の二名を伴って、志摩・熊野への旅に出発していった。ほぼ半月前の七月三十日に明治天皇が没して明治四十五年が終わり、大正に改元されたばかりであった。この時、折口の手には与謝野鉄幹の歌集『相聞』一冊が持参されていた。この旅は二十五日までの約二週間であったが、その間に詠まれた短歌百七十七首がまとめられて私家版の自筆歌集『安乗帖』として残された。

たびごゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ

松ふた木ある その梢夕日さし なぞの岬か波白く散る

町のかど 木ぶねにおとす水の音 旅のねざめの耳にしたしき

闇にこゑしてあはれなり 志摩の海 相差アツサの迫門に盆の貝ふく

もの買ふと入りたつ軒にうす日さす 奥の熊野の 小城下の昼

いま、冒頭の五首を掲げたが、後年の逍空短歌の特色である句読点などは見られないけれども、一字あきの表記とそれに伴う調べの創意をすでに確認できるのである。あるいはまた、逍空短歌の旅の歌の境地が感じられるとも言えそうである。

さて、本稿は、この『安乗帖』が公刊された第一歌集『海やまのあひだ』に収められてゆく、その過程において、きわめて重要な変更と改稿がなされている点に注目するとともに、併せてその作品行為のうちに〈折口学〉の相貌が認められることを論ずるものである。

歌集という作品に学問を見ると、きわめて危うい立場に対して、危惧をおぼえる人々の顔が浮かんでくる。作品と学問、創作と研究を区別なしに捉えているわけではないし、当の折口信夫自身もその別を混同させているわけでもない。しかしながら、現在まで折口の学問論を、また世にいう〈折口学〉の内実を彼の作品と学問の統一体の彼方に見据えて来た者としては、そのまなざしで展望したいという欲望に打ち勝つことができない。それゆえに、本稿では、大いに欲ばって、まず歌集『海やまのあひだ』が放つ〈折口学〉の相貌を確認するもので、具体的には歌集名「海やまのあひだ」をめぐる問題である。次には折口の学問の特質を取り上げることである。ここでは、〈実感〉の学や、〈生活〉重視の学や、〈円環構造〉の学などである。この方は、すでに多くは論じてきたものである。しかし、今回は創作活動と研究活動が、いわば綾のように絡み、相互に補完し合っていることを見届ける点に本意があるのである。

二 表題「海やまのあひだ」ということ

第一歌集『海やまのあひだ』（初版本）は、大正十四年（一九二五）五月三十日、「自選歌集現代代表短歌叢書5」として改造社から刊行されたが、そこには明治三十七年（一九〇四）頃から大正十四年までの、ほぼ二十年間の作詠のうちから六九一首が選歌されて収録されている。第一歌集という事情を考慮するにしても、二十年間の長期に亘る作品がまとめられていることは、私にはいかにも長いという印象であるとともに、その歌集全体の名称として「海やまのあひだ」の表題があることを重く見たいのである。なぜならば、この第一歌集『海やまのあひだ』は、その歌集中に「海やまのあひだ」という連作はなく、世の多くの歌集などが収録中の一連作の表題を歌集全体の表題にしていることと異なるのである。

釈道空歌集に目を転じて、第二歌集『春のことぶれ』（昭和五年一月刊行）は「春のことぶれ」連作八首を収めており、第三歌集『水の上』（昭和二十三年一月刊行）は「水の上」連作三十九首を収めており、戦争歌集『天地に宣る』（昭和十七年九月刊行）は「天地に宣る」連作三十五首を収めており、最後の歌集『倭をぐな』（没後の昭和三十年六月刊行）は「やまとをぐな」連作三十六首を収めている。ほかに『歌集 山の端』（昭和二十一年六月刊行）もまた「山の端」連作七首を収めている。ただ、第四歌集『遠やまひこ』（昭和二十三年三月刊行）のみが例外で、先に示したように、他はすべて連作の表題が歌集の表題にもなっているのが実体である。すると、『海やまのあひだ』は異例ということになる。

ところが、よく知られているように、「海やまのあひだ」という表題は、歌集の表題になる以前から何度も連作の表題として用いられてきたという経緯がある。

現在、わたくしどもが確認し得る最初のもは、大正二年三月十五日発行の國學院大学同窓会誌「穂」第二年三月号掲載の「うみやまのあひだ」二十五首である。この資料は、旧全集では遺漏していたもので、新全集においてその存在が確認されたものである。そこには同誌の見開き二ページに二段組で次のような歌が採録されている。（歌の頭の番号は論者長谷川による）

うみやまのあひだ

折口信夫

- ① 旅ごゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗あのりの崎に 赤き灯の見ゆ
- ② わだつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の昼の夢と たゆたふ
- ③ 沖さけて七日の船路 しめり風野茨にふれて来と かゞふかな
- ④ み空とぶ日の来たるらし 渡津海の入日の風に 波のあがれる
- ⑤ 波ゆたにあそべり 牟婁の磯に来て たゆたふ命しばしやすらふ
- ⑥ わが乗るや天の鳥船 海さかの空うつ濤に 高くあがれり
- ⑦ 青海にまかゞやく日や とほぐし母が国べゝ 舟かへるらし
- ⑧ 夕波に鳴がなけば 青岸の上行く馬車の さびしかりけり
- ⑨ はたごやの二階より 見る長汀の闇夜に白く ひるがへる浪
- ⑩ 天つ日の光あはれにみだれたる 山菅原に 野木のかげひく
- ⑪ いり方の照る日いざよひ 大杉の七もとうかべ 霧ながれ来ぬ
- ⑫ 那智に來ぬ あゝ椰の葉の古き夢 そよひるがへし風どよむなる

- ⑬ 蝸のなける木の間の うすあかり 目いたく見つゝ 山をくだるも
- ⑭ わがさかりいやとほぐし 青山の夕かげ草に 鳥なきひそむ
- ⑮ 北牟婁の奥の小村にわく水の かなしき記憶 来る午後かな
- ⑯ ほの白う子らが頬見ゆれ 夕月夜 雫おち来る峽に草しく
- ⑰ さをなる かげおとす木によりかゝり われらは 今日の行きくれをいふ
- ⑱ やゝほそりて 子らが見ゆるにいとかなし わが若き日の まのあたりして
- ⑲ ゐろりに ほださしかこみ はかな顔してうちもだし 子らがむかへる
- ⑳ 胸ひろに かきはだけたる子らが服 すきて脈うつ 櫓のあかりに
- ㉑ 炉火あかし はかなき夢にゑめる顔 二つ前にし さしぐまれつゝ
- ㉒ ねむる子の 眉のあたりにたゞよひし夢より さめてやすく粟はむ
- ㉓ 山めぐり 二日人見ず あるくまの蟻の穴にも 見入りつゝ泣く
- ㉔ まがなしくにほひも来るか 雨気さむく 檜葉の青葉のたそがるゝ 山
- ㉕ 山あるき幾日の後よ たそがるゝ町の光に ほけてたゝずむ

いささか煩瑣な感はあるが、後述する本稿の展開の上からも厭わずに掲げることとした。この二十五首は、すべて『安乗帖』（大正元年十二月成る）収録歌であり、また大正二年十月から十二月までに四本編んだ同じく私家版の自筆歌集『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」収録歌であった。なお、語句等の異同はこの際問わない。

これが表題「海やまのあひだ」の始発である。そして、その中身はと言えば、折口の在職していた大阪府立今宮中学の生徒、伊勢清志・上道清一の二人を伴つての志摩・熊野の旅の歌詠である。

ここで、「海やまのあひだ」が表題として用いられた例を時系列に沿って、以下に掲げてみる。

I 「うみやまのあひだ」二五首（國學院大学同窓会誌「穗」第二年三月号、大正二年三月十五日発行）

〔注〕すべて『安乗帖』にも『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」にも収録されている。

II 「逕空集（海山のあひだ）」一一首（「日刊『不二』」大正二年七月十日号）^{（注）}

〔注〕Iの①②③⑧⑨⑩⑪⑫⑬の九首と次の二首による連作で、すべて『安乗帖』にも『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」にも収録されている。

闇やみにこゑしてあはれなり、志摩しまの海相差うみあふさの迫門せとに盆ぼんの貝かひふく

町まちのかど、木きぶねにおとす水みづの音おと、旅たびのねざめの耳みみにしたしき

III 「逕空集（海山のあひだ）」九首（「日刊『不二』」大正二年七月十七日号）

〔注〕Iの⑤⑦⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒の九首による連作で、すべて『安乗帖』にも『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」にも収録されている。

IV 「逕空集（海山のあひだ）」五首（「日刊『不二』」大正二年八月三日号）

〔注〕Iの⑥⑳㉑㉒㉓の五首による連作で、すべて『安乗帖』にも『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」にも収録されている。

V 私家版自筆歌集『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」九九首（大正二年十月）

〔注〕Iの二十五首全部を収録している。

VI 「海山のあひだ」一九首（「國學院雑誌」第二十一卷第六号、大正四年六月発行）^{（注）}

〔注〕Iの①②③⑤⑪⑫⑬⑭⑮の九首とその他十首による連作で、『安乗帖』には十七首が収録され、『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」には十九首すべてが収録されている。

VII 「海山のあひだ」二二首（「國學院雑誌」第二十一卷第七号、大正四年七月発行）

〔注〕Iの⑩⑳とその他二十一首による連作で、『安乗帖』にはうち十九首が収録され、『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」には二十三首すべてが収録されている。

VIII 私家版自筆歌集『うみやまのあひだ』二〇二首（安藤英方所蔵、大正四年夏以前成立）^{註3}

〔注〕右のI〜VIIの全歌詠が収録されている。

IX 「海山のあひだ——南九州の旅に」三八首（『國學院雜誌』第二十六卷第五号、大正九年五月発行）^{註4}

〔注〕「アララギ」大正八年一月「日向の国」連作中の七首、同二月「日向の国」その二」連作中の十四首、同四月「日向大隅」連作八

首、同六月「福岡」連作中の一首の合計三十首に、同じく「アララギ」大正六年十一月「山および海」連作中の七首を加え、残りの一首は当該の「國學院雜誌」大正九年五月「海山のあひだ」で初出發表されたものである。

X 「海山のあひだ」二二首（「日光」第一卷第七号、大正十三年十月発行）^{註5}

〔注〕「海山のあひだ」の表題のもとに、「奥熊野」連作十一首と「蟹の村 老岐」連作十一首が掲げられている。

XI 第一歌集『海やまのあひだ』六九一首（大正十四年五月刊行、改造社）

右のことが明らかにすることは、次の点である。

- (1) IからVIIIまでは、大正元年八月の志摩・熊野の旅での歌詠で、いわゆる『安乗帖』の歌であること。
- (2) IXは、大正六年八月末から九月末までのアララギ会員のための講演旅行の折の歌詠と大正八年三月の鹿児島にいる伊勢清志を訪ねた折の歌詠をまじえたものであること。

(3) Xは、右の①②と異なり、伊勢清志に関係のない（一応そのように捉えておく）海山の歌詠であること。

つまり、「海やまのあひだ」は、『安乗帖』や「伊勢清志」の色を薄めてきて、遂には歌集全体の意味へと広がってきていることが読み取れる。

この傾向は、次の点からも言い得ることである。前掲のIの二十五首（大正二年三月発表）を改めて読むと、

- ⑬ ほの白う子らが頬見ゆれ 夕月夜 雫おち来る峡に草しく
- ⑭ さをなる かげおとす木によりかゝり われらは 今日の行きくれをいふ
- ⑮ やゝほそりて 子らが見ゆるにいとかなし わが若き日の まのあたりして

⑲ るろりに ほださしかこみ はかな顔してうちもだし 子らがむかへる

⑳ 胸ひろに かきはだけたる子らが服 すきて脈うつ 櫓のあかりに

㉑ 炉火あかし はかなき夢にゑめる顔 二つ前にし さしぐまれつゝ

㉒ ねむる子の 眉のあたりにたゞよひし夢より さめてやすく粟はむ

の七首が旅に同行した二人の少年を詠んでいることがわかるが、これは、同年七・八月の「日刊『不二』」（後、「不二新聞」）紙上に発表されたⅢ・Ⅳの「逍空集（海山のあひだ）」にすべて採録されているのに、二年後の大正四年の六・七月に発表された「國學院雑誌」掲載の「海山のあひだ」十九首と「海山のあひだ（二）」二十三首においては、採録されることがなく、すべて捨棄されている点にも認められる。また、Ⅹの第一歌集『海やまのあひだ』では、「奥熊野」連作二十三首としてこの歌群は採録されているが、Ⅰの「うみやまのあひだ」二十五首からは七首（①②⑤⑥⑦⑫⑬）が一致する中で、右の七首はすべて入集していないことから、「伊勢清志」らの歌詠の色合いは薄まっている。

そして、随伴した生徒たちを詠んだ右の七首を削除すると、わたくしども読者には、この旅が著者のひとり旅に変わって来るのである。

このように、表題「海やまのあひだ」が『安乗帖』および「伊勢清志」から離れて進展したことは、明らかであったけれども、その大きな転換点はⅩの大正九年と言えないではないか。偶然の一致か、Ⅹの「海山のあひだ」三十八首が発表された「國學院雑誌」（大正九年五月）には折口の異郷論の論文「妣が国へ・常世へ——異郷意識の起伏（その一）」が発表されていることに注意が向く。

十年前、熊野に旅して、光り充つ真昼の海に突き出た大王ヶ崎の尽端に立つた時、遙かな波路の果に、わが魂のふるさとのある様な気がしてな
らなかつた。此をはかない詩人氣どりの感傷と卑下する気には、今以てなれない。此は是、曾ては祖々の胸を煽り立てた懐郷心（のすたるぢ
い）の、間歇遺伝（あたるずむ）として、現れたものではなからうか。

すさのをのみことが、青山を枯山カラヤマなす迄慕ひ歎き、いなひのみことが、波の穂を踏んで渡られた「妣ハハが国」は、われ／＼の祖たちの恋慕した魂
のふる郷であつたのであらう。（『古代研究』民俗学篇Ⅰ所収「妣が国へ・常世へ 異郷意識の起伏」）

「われ／＼の祖たちが、まだ、青雲のふる郷を夢みて居た昔から、此話をはじめ」と書き出されたこの論文は、折口信夫の学問における最も重
要な価値をもつ大著『古代研究』全三巻の「民俗学篇Ⅰ」（昭和四年四月刊行、大岡山書店）の巻頭に据えられている。そして、右の文中の「十年

前、熊野に旅して」志摩の大王ヶ崎の突端に立つて「妣が国」および「常世」を幻視した、その体験こそがまさに大正元年八月の『安乗帖』の旅であつたのである。^{註6)}

青海にまかゞやく日の とほくし母が国へ 船かへるらし

と『安乗帖』に詠まれており、前掲の「穂」発表の連作「うみやまのあひだ」では⑦の歌に当たる。ここには、しっかりと異郷「母が国」（また「妣」の字は用いられていない）が詠まれていたのである。これは後述するが、わたくしなどは、この在り様に「折口信夫」という個体のうちに作品と学問との表裏一体の關係性を見るとともに、その学問の方法としての〈実感〉の学の萌芽をも感得するのである。

いま、一つの読みとして、大正九年頃から表題「海やまのあひだ」の内容が変容し、Xのような経過を経て、XIの第一歌集『海やまのあひだ』という歌集全体の名となつた、と捉えるのである。

三 〈かそけさ〉 〈ひそけさ〉の発見

若き折口信夫は、志摩の大王ヶ崎の突端に立つて、その海の彼方に「わが魂のふる郷」である異郷を幻視する体験をもつて、

青海にまかゞやく日の とほくし母が国へ 船かへるらし（『安乗帖』）

と詠み、同時に、この時の〈実感〉は後年の論文「異郷意識の進展」（「アララギ」大正五年十一月号）の成立に働き、また先にも引用した論文「妣が国へ・常世へ——異郷意識の起伏（その一）」（「國學院雜誌」大正九年五月号）にも作用してゆくのである。なお、この異郷論は、論文としてまとめられたのは右の通りであるが、口頭の発表としては、もっと早く、大正四年三月十二日夜の國學院大学国文学会例会における同題の「異郷意識の進展」の講演である。

ここで、わたくしどもはまた、立ち止まらなければならない。確かに右のように、異郷幻視の体験が短歌作品に詠まれ、さらに異郷論として論文にまとめられてゆく回路を捉えることができるけれども、こうした作品から論文へという道筋で回収されてゆく面だけを見てゆくことは片手落ちである。『安乗帖』には二十代半ばの青年の瑞々しい、そして感傷的な情調が充ち満ちていて、逍空短歌における青春歌集であることを確認しておか

なければならぬ。

たびごゝろもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の崎に 赤き灯の見ゆ

これが『安乗帖』の巻頭歌である。キラキラと光る真昼の海の彼方に「妣が国」を幻視した、その同じ青年が旅の感傷に浸っているのである。

わだつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の昼の夢と たゆたふ

波ゆたに遊べり 牟婁の磯に来て たゆたふ命しばしやすらふ

ここには、作者のアララギ体験以前の感傷性と浪漫性が横溢していることを、誰でもが認めることであろう。

それが、十数年後の第一歌集『海やまのあひだ』（初版本）に収められると、

たびごゝろもろくなり来ぬ。志摩のはて 安乗の崎に、灯の明り見ゆ

わたつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の昼の夢と たゆたふ

青うみにまかゞやく日や。とほぐし 妣が国べゆ 舟かへるらし

波ゆたにあそべり。牟婁の磯にゐて、たゆたふ命 しばし息づく

と語句を改変し、句読点も施して「遙空短歌」の完成となる。一首目の結句が「赤き灯の見ゆ」から「灯の明り見ゆ」への改変は、作品としての完成度をみることができなければならない。その一方で、「赤き灯」という感傷の情調に未練をおぼえるのは私だけであろうか。いささか独断的に言えば、右のような『安乗帖』における「母が国」から「妣が国」へと学問領域へと進展してゆく回路と、感傷の情調を湛えた「赤き灯の見ゆ」が「灯の明り見ゆ」と作品の完成度を高めてゆく回路と、この二つが包含されている点に（折口学）の相貌を読み取るのである。その具体例を表題「海やまのあひだ」の用いられ方の過程のうちにみるのである。

①ほろ／＼とちるはかなしき色なりし野径にさける紫の花

（『安乗帖』大正元年十二月）

②ほろ／＼と散るがかなしき色なりし 野径にさける 空色の花

（贈呈本『ひとりして』大正二年十月）

③ほろ／＼と 散るがかなしき色なりし 志摩の横野の 空色の花

（安藤本『うみやまのあひだ』大正四年夏以前）

④ほろ／＼と散るがかなしき色なりし 志摩の横野の 空色の花

(「国学院雑誌」大正四年七月号)

⑤あかときを散るがひそけき色なりし 志摩の横野の 空色の花

(増補本『ひとりして』大正四年夏)

⑥あかときを 散るがひそけき色なりし。志摩の横野の 空色の花

(初版本『海やまのあひだ』大正十四年五月)

〔注〕②の初句は「ほろ／＼と」の誤記であろう。なお、傍線は長谷川による。以下同じ。

下句にも改変が認められるが、ここでは第二句の傍線部に注意したい。この問題はすでに早くに論じたことであるが、本稿の論旨にも関係があるので、改めて再説しておく。^(注)

「かなしき」が「ひそけき」に改変されるのは、大正四年の夏のことである。この現象は他の例にも見られることで、以下に二例ほど提示してみる。

①青山に夕日まざ／＼照るころや 奈屋の入江に 家もあらぬかな

(『安乗帖』)

②青山に夕日まざ／＼照るころや 入り江の街のかなし あらはに

(贈呈本『ひとりして』)

③青山に 夕日まざ／＼照る頃や 入り江の町の かなし あらはに

(安藤本『うみやまのあひだ』)

④青山に 夕日まざ／＼照る頃や 入り江の町の かなし あらはに

(「国学院雑誌」大正四年六月号)

⑤青山に夕日まざ／＼照るころや 入り江の町の さびし あらはに

(増補本『ひとりして』)

⑥青山に、夕日片照るさびしさや 入り江の町のまざ／＼と見ゆ

(初版本『海やまのあひだ』)

①の下句の改変や⑥の大きな改作もさることながら、ここでは傍線部に注意すると、やはり「かなし」が「さびし」に改められるのは⑤の大正四年夏のことである。

①藪原に 木槿の花の咲きたるも よそ目かなしき 色と見て行く

(『安乗帖』)

②藪原に むくげの花の咲きたるが よそ目かなしき色と見て すぐ

(贈呈本『ひとりして』)

③藪原に 槿の花の咲きたるも よそ目かなしき色と見て すぐ

(安藤本『うみやまのあひだ』)

④藪原に むくげの花の咲きたるも よそ目かなしき色と見て すぐ

(「国学院雑誌」大正四年七月号)

⑤藪原に むくげの花の咲きたるも よそ目さびしき夕ぐれを行く

(増補本『ひとりして』)

⑥藪原に、むくげの花の咲きたるが よそ目さびしき 夕ぐれを行く

(初版本『海やまのあひだ』)

前の例に比べれば、これは最も語句の変更の少ないものであるが、傍線部の「かなしき」から「さびしき」への改変は、やはり⑤の大正四年夏のことである。

釈道空(折口信夫)の短歌作品における歌語「かそけさ」「ひそけさ」の発見への過程は、まずはじめに大正四年夏の時点があり、次いで次の例などによって確認できるように、アララギ同人をやめた大正十年の末前後の時点がある。

ふるさとの町をいとふと思はねば人に知られぬ思ひを持てり

(「アララギ」大正九年二月号)

ふるさとの町を いとふと思はねば、人に知られぬ思ひの かそけさ

(初版本『海やまのあひだ』)

この心悔ゆとか言はむひとりの母をさびしく死なせたるかも

(「アララギ」大正七年八月号)

この心 悔ゆとか言はも。ひとりの おやをかそけく 死なせたるかも

(初版本『海やまのあひだ』)

湍を過ぎて淵によどめる波のおもかそけき音もなくなりけり

(「アララギ」大正十年四月号)

湍を過ぎて、淵によどめる波のおも。かそけき音も なくなりけり

(初版本『海やまのあひだ』)

山のうへに、さびしき人ら住みにけり。この道くだる心はなごめり

(「白鳥」大正十一年七月)

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり来る心はなごめり

(初版本『海やまのあひだ』)

右のように、「アララギ」発表の歌などが「かそけさ」およびその類縁語に収斂されてゆく。

いま、初版本『海やまのあひだ』における「かそけさ」「ひそけさ」およびそれらの類縁語と、さらに「さびしき」も加えたそれらの用例数を年度毎で見ると、次のような表になる。

	大正	かそけさ	ひそけさ	さびしさ
4	年	2	1	12
5	年			1
6	年	1		10
7	年			
8	年			9
9	年	2		5
10	年	1		4
11	年	1		12
12	年	3		2
13	年	2	5	12
14	年		1	
合計		12首	7首	67首

右の表もまた、先に述べたごとく、ほぼ大正四年および同九年以降に集中していると言えるが、当の逄空自身は、次のように語っている。

感傷を描写して、悲劇的效果を収め得ることを知った私は、急に世界の明るくなるのを感じた。自由に羈旅の哀感を歌ひ出した。でも、さすがに「さびし」「かなし」を露骨に言ふのを憚った。「かそけさ」「ひそけさ」なる語に特殊の内容を持たさうとしたのも、其ためである。其でも尚、世間の人事には、「かそけさ」「ひそけさ」の明るい孤独には包みきれない哀傷がある。私は、「さびし」「さびしさ」をも、あまり恥ぢないで言ふほどに、腹がすわつて来た。(『釈逄空集』「追ひ書き」^(注))

「自由に羈旅の哀感」を歌い出したが、それを「悲劇的效果」のある「さびし」や「かなし」の語に託すことを憚らざるを得なかつた。なぜならば、あまりにその「感傷」を露骨に表現することになり、私情すぎて普遍化されず、いわゆるセンチメンタルな位相に留まつて「文学」を割り引いてしまうからである。そこで発見してきた語が「かそけさ」であり、「ひそけさ」であつた。しかし、この「明るい孤独」感を内容とする「かそけさ」や「ひそけさ」の語では表現できない、それとは別種の人の世の「哀傷」があることにも気づいて、「さびし」や「さびしさ」の語を再生させて用いるようになったと言っている。

以上のように、逄空短歌固有の「かそけさ」「ひそけさ」の歌境の成立してくる過程を述べてみた。

四 〈実感〉の学——折口学の方法

志摩・熊野の旅での歌詠が『安乗帖』としてまとめられ、またそれらの歌が「海山のあひだ」の連作として時と場を異にしつつ発表されて来たことは、前節までに述べて来た通りである。この「海山のあひだ」の意味内容に通底している、と私などが想起することは、折口が大正六年の八月二十四日の浜松弁天島での講演を皮切りに、アララギ会員のための講演と歌会の旅に出て、十月三日に帰京する、その途次における尾道での印象を記した文章である。そこには、次のようなことが語られている。

尾道に来た。山と海との間の細長い空地に、遠く延びた町である。山の上には、寺の葺や畑や田が見えるばかりで、人はまだ幾程も山を領有してゐない。山陽線を西に走るほど、山と海との接近の度が強くなつて来て、この二つの大きな自然に脅かされて跼蹐シヤクシヤクつて住んでゐた、祖先の生活が思はれる。柳田先生は、日本を山島と異名してゐられる。わたしは天野家の稍せうかけづづくりの傾きを持つた二階座敷ニカイザシキに居ゐて、日本人の恐怖と憧憬シヨウケイとの精神伝説を書いて見たいと思うた。

すぐ前には、出雲越えの峠が、赤々と夕日に照つてゐる。僅かな峽村の窪地には、真中を細い川が流れてゐて、浦近い事を思はせる様な塩じみた苔の葉が延びて見える。さうした景色をば見おろしながら「わたつみかやまつみか」「妣の国へ 常世へ」この二つの創作の題目が胸に浮んで来た。今すこし気魄の回復と、精力の永続とを信じてゐることが出来る日まで、育み立てゝ行かねばならぬと思ふ。(「海道の砂 その一」)

この紀行文は「アララギ」誌上に「街道の砂」の原題で同年の十一月に発表されたものの一節であるが、この詩人に感得された「山と海との間の細長い空地」や「山と海との接近の度が強くなつて来て」いる土地の印象は、まさに数年前の志摩・熊野の旅において感得した「うみやまのあひだ」と重なるものであつたはずだ。すなわち、「うみやまのあひだ」とは、海と山の間の狭い空地(里)に「跼蹐シヤクシヤクつて住んで」生活しているわれわれの国を意味していたのである。師の柳田国男は「山島」と命名したが、折口は「島山」と称なづした。なお、文中にある「日本人の恐怖と憧憬シヨウケイとの精神伝説」は、途中で紆余曲折があつたにしても、昭和十四年に雑誌発表され、その後、十八年九月に加筆訂正が施されて単行本にまとめられた『死者の書』(青磁社刊)として具体化したものではなかつたか。

ところで、前節までに見てきた表題「海山のあひだ」の中身の変更過程、つまり志摩・熊野の旅の歌詠の表題から、それを脱して右の大正六年夏のアララギ会員のための講演旅行の歌詠「始羅の山」を中心とした連作の表題（「海山のあひだ——南九州の旅に」）へ（大正九年五月のこと）、さらに「奥熊野」連作や大正十年八月の杵岐への探訪旅行の折の歌詠である「蚕の村 杵岐」連作（大正十三年八月の第二回目の杵岐旅行の際の歌詠も含むか）をまとめた「日光」（大正十三年十月発行）掲載の「海山のあひだ」の表題を経て、第一歌集『海やまのあひだ』（大正十四年五月、改造社刊）の歌集全体の表題へと進展した、その過程において、先に引用した紀行文が伝える体験とそこで抱いた実感は大きく影響を与えるものだったと考えられる。

ここで、折口信夫の学問が「海山のあひだ」に生きた「祖先の生活」を研究するものだったと言え、あまりに唐突であり的外した妄言である、ということになるのだろうか。彼の論文と創作がきわめて近い関係、相互補完的なものであったことは、早くに加藤守雄氏の論じたことであつた。また、これも加藤氏が論じたことであつたが、本稿もまた、折口学の方法としての〈実感〉の学の内実を再確認しなければならぬ。

私は、過去三十年の間に、長短、数へきれぬほど旅をして来た。その中でも、近い十五年は、旅をする用意が變つて来た。民間伝承を採訪する事の外、地方生活を実感的にとりこまうと努めた。私の記憶は、採訪記録に載せきれないものを残してゐる。山村・海邑の人々の伝へた古い感覚を、緻密に印象してえた事は、事実である。書物を読めば、此印象が実感を起す。旅に居て、その地の民俗の刺戟に遭へば、書齋での知識の連想が、実感化せられて来る。（『古代研究』「追ひ書き」、昭和五年六月、『新全集』第三卷四六九〜四七〇ページ）

言わば、「知識と経験との融合を促す、実感」を重視し、「資料と実感と推論とが、交錯して生まれて来る、論理を辿る事」を方法とする折口学である。また、こうも言う。

哲学と科学との間に、別に、実感と事象との融合に立脚する新実証学風があるはずである。一方は固定した知識であり、片方は生きた生活である。時としては、両方ともに、生命ある場合もある。此二つを結合するものが、実感である。（中略）私の研究は、空想に客観の衣装を被せたものは、わりに尠い。民俗を見聞しながら、又は、本を読みながらの実感が、記憶の印象を、喚び起す事から、論理の糸口を得た事が多い。其論理を追求してゐる間に、自らたぐり寄せられて来る知識を綜合する。（同、四七六〜四七七ページ）

その〈実感〉は、「鋭敏に、痛切に起す素地を——天稟以上に——作らねばならぬ。而も、機会ある毎に、此能力を馴らして置く事が肝腎であ

る」という。

旅において「地方生活を実感的にとりこまうと努めた」折口であったからこそ、日本の古代研究としては「朝鮮民族や、大陸の各種族の民俗」にも手を拵げなければならないが、「全く実感の持てぬ私」としては、それが出来ないとの主旨をも語っている。「其地を踏まぬ私は、自然かう言ふ態度を採る外はないのである。今の中、沖縄の民俗で解釈の出来るだけはして置いて、他日、朝鮮や南支那の民間伝承も、充分に利用する時期を待つてゐる」とも言っている。折口は、周辺諸国との比較研究の必要性を認識していたが、それに踏み出すには、それらの生活の〈実感〉が持てない限り不可能だという考えであった。国学院在学中に本田存および金沢庄三郎に習った「朝鮮語に就いては、相当の自信もあつた」し、外国語学校の夜間で「蒙古語」も学んだ折口であつても、その土地に住み生活をして〈実感〉を持てるまでは手をつけることができないというのである。

折口の言う〈実感〉は、決して恣意的な当て推量の勘などではないのである。文献以外の民間伝承や生活習俗などを研究資料とする民俗学においては、ましてや折口のように、「古代」とりわけ大和朝廷成立以前の日本列島の古代びとの心を解読しようとする研究においては、この〈実感〉という方法も有効ではないのか。^(注1)

再び先に引用した「私は、過去三十年の間に……」の文を想起したい。この昭和五年（一九三〇）の『古代研究』「追ひ書き」執筆時から「近い十五年は、旅をする用意が變つて来た。民間伝承を採訪する事の外、地方生活を実感的にとりこまうと努めた」ということは、わたくしには、それが歌人釈道空の短歌作品の上に直接間接に関与し、研究の側から言えば、〈実感〉の方法のその〈実感〉に大いに歌詠が機能していたと見るのである。

五 〈生活〉重視の学——折口学の特色(1)

本節と次節は、すでに論述したことである。^(注12) 前節までの文脈からも予想されることと思うが、ここで、折口学の特色の一つと捕捉した〈生活〉重視の問題を絡める必要性を強く覚えるし、さらに「生活」を掘り起こす学者折口信夫と「文学」を掘り起こす文学者釈道空の合一を彼自身の覚悟の言説のうちに捉えることができる以上は、これまた本稿が当然取り込むべきものと考えるのである。

折口の〈生活〉重視の言説は、次のように始まる。

政治史より民族史、思想史よりは生活史を重く見る私共には、民間の生活が、政権の移動と足並みを揃へるものとする考へは、極めて無意味に見える。^(註)

これは、「白鳥」第一巻第一号（大正十一年一月発行）に発表された「万葉びとの生活 その一」からの引用であるが、「民族史」「生活史」の重視を明らかにしている。折口は、この文章の冒頭で、「飛鳥の都以後奈良朝以前の、感情生活の記録が、万葉集である。万葉びとと呼ぶのは、此間に、此国土の上に現れて、様々な生活を遂げた人の総べてを斥す」と書き出し、右の引用文を挟んで、この万葉びとについての「その理想の生活」を、次のように述べている。

彼らにとつては、殆偶像であつた一つの生活様式がある。彼らの美しい、醜い様々の生活が、此境涯に入ると、醇化せられた姿となつて表れて居る。

其は、出雲びとおほくにぬしの生活である。

「万葉びと」の「感情生活の記録」が『万葉集』であり、この歌集の研究として、また国文学の研究として、折口はその文学性や文学的価値を問うことなく、「感情生活」あるいは〈生活〉を問い続けるのである。^(註)なお、「万葉びとの生活」の表題は、大正九年一月の「アララギ」第十三巻第一号に「万葉人の生活」として発表されたのを初出とする。ただし、これは「書き出し 万葉集の成立」という章題のもとに書かれたもので、いわば序章と考えられる部分で終わっており、その後、折口はアララギとの関係を悪化させているので、いわゆる表題どおりの「万葉びとの生活」は中絶したものと推察される。そして、自身が発刊した雑誌「白鳥」に右の論を四回連載することになったのであろう。

なお、表題に「生活」の語が用いられた初出ということになれば、大正三年二月七日夜に、大阪の文芸同攻会の第一回例会における講演「語部の生活」という演題であろうか。次いで、同十六日・三月七日・同二十一日の三回にわたつて「暗面生活に於ける言語意識の進化（性慾篇）」の表題で講演しているものが続く。また、内容的に注意をすれば、明治四十三年のこと、折口の二十四歳の時に、「人に伝へることが出来ないほど」に感激したドミートリイ・セルゲーヴィチ・メレジュコフキイの『背教者ジウリアノ』（島村荃三訳）について、「私一己にとつては、じゅりあん皇

帝を扱つたためしゆこふすきい氏の文学は、文学と言ふよりは、生活として感じられた。精神として感じられた」(「寿詞をたてまつる心々」昭和十三年五月、『新全集』第十七卷四二五ページ)と後年回想していることが思われる。このことは、実際に、「国文学の発生(第二稿)」(大正十三年十月発表)などに具体的にその影響を認めることができる。^(註15)

ところで、折口の言う「生活」は、精神生活・信仰生活の意に近く、また「人生」の語にも通ずるものであつた。この〈生活〉の重視は、学者折口信夫のみならず、詩人釈道空においても重視されたものと言える。

私は、町人の子である。人事に、心を動されることが、頗深い。若くから自然に狎れきつて、海山の間の遊行を娛しんだ。けれども、山も海も見るとはなかつた。そこに営まれるひそかな人生に触れたかつた為らしい。

これは、現代短歌全集第十三卷『釈道空集』「追ひ書き」(昭和五年九月、改造社刊)中の一節である。詩人の目には、山や海の風景がなく、「海山の間に」「営まれるひそかな人生」や生活が感動をもつて見えていた。

それでは、なぜ〈生活〉の重視か。その理由の一つを、次のように述べている箇所がある。

私どもは実証には、生活の裏打ちがなくては問題にならないと考へてゐる。殊に史学系統の学問では、此が唯一生命と謂つてよいのだと思ふ。

「日本評論」第十三卷第六号(昭和十三年五月発行)に発表された「寿詞をたてまつる心々」の文である。学問的実証には「生活の裏打ち」が必須の条件であると主張する折口であるが、その「生活」は前節の〈実感〉の方法においても、極めて大切なものであつたことを併せて想起しておきたい。

六 〈円環構造〉の学——折口学の特徴(2)

〈生活〉の重視、それは次のような点にも絡んでいたのである。

我国の戸籍の歴史の上で、今一度考へ直さねばならぬのは、団体亡命に関する件である。住みよい処を求める旅から、終には旅其事に生活の方便が開けて来て、巡遊が一つの生活様式となつて了ふ。彼等の持つて居る信仰が力を失うても、更に芸能が時代の興味から逸れない間、彼等の

職業が一分化を遂げざる迄の間は、流民として漂^{ウカ}れ歩いたのである。（『新全集』第一卷一一一〜一二二ページ）

これは『古代研究』国文学篇所収の「国文学の発生（第二稿）」（大正十三年十月発表）の一節であるが、折口の文学発生論においても、「生活」は深く関わっていた。漂泊者たちに言及したところで、「住みよい処を求め旅」の生活から「終には旅其事」つまり「巡遊が一つの生活様式となつて了ふ」というのである。「生活」から「生活様式」へと進展するのである。この点について、もつと明確に語っている文がある。

生活の様式を産み、其一つの様式が、日本の文学を産み出して来た。だから、日本文学は、日本民族の生活が作つたとは言へるが、日本の民族性格が、かう言ふ種類のものを作つたと言ふ事は出来ない。（『新全集』第四卷三六〇ページ）

「俳句研究」第八卷第七号（昭和十六年七月発行）に「日本文学における笑ひ」の表題で発表され、後、『日本文学の発生 序説』（昭和二十二年十月、斎藤書店刊）に収録された際、「笑ふ民族文学」と改題された論文の一節である。また、

私は、文学の目的を、人生に於ける新しい論理の開發と言ふ点に据ゑて居る。（『新全集』第二十九卷一七一ページ）

と「新しい論理の開發」大正十五年四月発表で述べ、さらに、次のようにも述べている。

人間生活の新論理は、論理自身からは出て来ない。創作時の内的律動が、社会的暗示や、人間伝襲の問題を具体化して行く。そこに、展開せられ、意識化せられた新論理は、新しい生活の基礎である。其は言語を以て思想を掘つて行く文学の、第一義の使命である。生命律に添ふこと、散文学よりも強い韻文学に於いては、殊に其力が著しく發揮せられる。（中略）既成の短歌の拍子が、日本人の生命律に、一等緊密なものと言へる。だから、今の処まだ短歌以上に、日本人の潜んだ生活の新論理を意識化して行く詩形はない。此が古典詩ながら、短歌の生きて来た所以である。

かう言ふ考へから、情調から論理をひき出す事、個人を通じて、社会的暗示を具体化する事が、文学の詮ある為事であり、道徳も信仰も、法律も闘争も、文学によつて新しい原理を示される。さうして、其を発見し、組織するのが、批評家のほんたうの為事だ。新生活の為の哲学者が、批評家の真意義である。かう考へて来た私だ。（『新全集』第二十九卷三六六ページ）

長い引用になつたが、これは、「近代風景」第二卷第一号（昭和二年一月発行）に掲載された「辻談義」で、後に「歌の円寂する時 続篇」と改題される。右の文には、二つのことが述べられていて、一つは文学によつて論理が発見され、その論理が生活を作つてゆくことであり、もう一つは

日本人の生活の新論理を意識化してゆくものが短歌であることである。

これまでのことをまとめると、折口は、まず「生活」があり、その「生活」が「(生活)様式」を産み出し、それが「文学」を産み出して、この「文学」が「論理」を発見し、さらにこの「論理」が新しい「生活」の基礎を築き、その新「生活」が新たな「生活様式」を産み出してゆく、と考えていたのである。つまり、「生活」↓「(生活)様式」↓「文学」↓「論理」↓「生活」↓……という円環構造が展開されているのである。まさに、これは折口学の構造だと言えるのではないか。だからこそ、折口は、前述の「笑ふ民族文学」の別の箇所でも、「文化現象に於ける本質とは、変化を約束されてゐる『事実』なのだ」(『笑ふ民族文学』『新全集』第四卷三六〇ページ)と説くことができたのである。「本質と言ふものは、動くべからざるものなのに、事實は動くものとして現れて来る。本質から離れたものを作れば、既に別のものである筈なのに、事實誹諧の本質から離れたものを作つた芭蕉は、歴史の上からは、誹諧をうち立てた人として見られてゐる。蕪村も、子規も、子規の後に活躍した碧梧桐などにも、本質的なものに対する動きを見ないでは居られない」(『日本文学の内容』昭和十三年十二月発表、『新全集』第四卷二八八ページ)とも述べている。

また、先の〈円環構造〉の図式において、「生活↓(生活)様式」の部分を取り扱うのが民俗学であり、「文学↓論理」の部分を対象とするのが文学研究であると言えよう。そして、この民俗学と文学研究は、折口学においては民俗学的国文学研究あるいは発生論的国文学研究として接続しているのである。

七 「生活」「人生」を詠う——逍空短歌のまなざし

生涯歌のわかれをせずに自己表現し続けた逍空の個的モチーフが、前節で言及したように、短歌は日本人の生活に潜むその新論理を意識化させる最も有効な詩形であると評価を下した折口の学的モチーフと軌を一にしていた。しばしば折口は、たとえば、「歌は、日本人にとつて、一つのごくすとなのかも知れない」(『釈逍空集』「追ひ書き」昭和五年九月、『新全集』第三十一卷三一―三一二ページ)と語っているが、短歌は日本人の怨霊であるがゆえにと言ふべきか、新しい生活の基礎となる生活の新論理を掘り起こしてゆく、と言ふわけである。

第一歌集『海やまのあひだ』（初版本）に再び目を転ずれば、そこには、まさしく「海山の間」に「営まれるひそかな人生」に触れた歌の世界が展開されていると言える。

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり（2番）（在位）

蟹の家 隣りすくなみあひむつみ、湯をたてにけり。荒磯のうへに（14番）

これの世は、さびしきかもよ。奥山も、ひとり人住む家は さねなし（38番）

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを われに聞かせつ（61番）

山びとは、轆轤ひきつゝあやします。わがつく息の 大きと息を（63番）

人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどのかそけさ（71番）

邑山ムラの松の木コむらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅びとの墓（73番）

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり来る心はなごめり（88番）

島の井に 水を戴くをとめのころも。その襟細き胸は濡れたり（134番）

ながき夜の ねむりの後も、なほ夜なる 月おし照れり。河原菅原（142番）

歌集の前の方から適宜十首ほどを引いてみた。各歌への言及は避けるが、山や海や、あるいは引用はしなかったけれども、集中には年の暮れや元旦の歌が多く収められ、そこには作者の生活ぶりが色濃くうかがえるところに、私には歳暮から正月にかけての時間における作者の〈実感〉の在り様をうかがわせているように感じられて仕方がない。

折口信夫は同時に釈道空という歌人であったが、この歌人であったことこそが折口学の〈実感〉の方法に大きく寄与したというのが本稿の結論である。加藤守雄氏が、早くに指摘したように、「論文と創作とが、しばしば同じ態度で書かれている」（在位）のであり、この距離の近さが両者の危うさを孕むことになるけれども、実はこれこそが〈折口学〉の稀有な在り様の因子ではないのか。未だ多くの折口学説は仮説であるかもしれない。しかし、文献のない、もしくは少ない時代や世界、一般的な実証の難しい感情生活や精神生活を捉えたいとなれば、それは常に「仮説」という冠詞を負わなければならないだろうが、許容の範囲ではないのか。それは、今なおその学説が光彩を放っているからである。

八 短歌を詠むこと

「先生の著述目録を整理していると、時に、ほん気で、短歌をのろいたくなることもある」（『まればとの座』中公文庫版三七ページ）と、師の折口信夫が六十六歳の生涯を閉じてまもなくの昭和二十九年三月の時点では、池田彌三郎氏は作歌に費やすエネルギーと時間を学問に使うべきだと嘆いておられる。晩年の池田氏は必ずしもそうではなかったように、私などは理解しているが、とにかく一度は右のように慨嘆されたことは事実であった。

このように、学者折口信夫にとって歌人釈道空は負の存在であったとする考えは、確かにあるだろうし、理解できないわけではない。しかしながら、私一己の捉え方としては、むしろプラスに働くものと早くから判断をしていた。すでに述べてきたように、〈実感〉の学であり、〈生活〉を重視して「生活の裏打ち」を求める折口信夫の学問においては、その〈実感〉なり「生活の裏打ち」なりを担保してゆくものとして、きわめて有効に「短歌を詠むこと」が機能していた、と私などは捉えるのである。彼ら歌人は、心熱を高めて世界を感受し、言葉に定着させ、さらに記憶の層に堆積させてゆく。私どもは、そうした光景を幾度となく目のあたりにして来た。これが〈実感〉の学である折口信夫の学問に作用しないことがあろうか。

九 結びにかえて

志摩・熊野の旅の歌詠をまとめた『安乗帖』、さらに「海山のあひだ」として衣替えしてゆくこと、そこに田山花袋の『南船北馬』の諸編が絡んでいたことは、持田叙子氏が論じて明らかになっている。^(註19) また、「海山のあひだ」という語が志摩・熊野という特定の場処からそれを越えて「日本」という島国全体を表わす語へと深化拡大してゆく点も跡づけられている。ゆえに、本稿は持田氏の論旨の再確認という面をもつものであるが、ふたたび、歌集『海やまのあひだ』に立ち返る時、

この集を、まづ与へむと思ふ子あるに、

かの子らや われに知られぬ妻とりて、生きのひそけさに わびつゝをぬむ

という献辞とも言うべき巻頭歌の存在が気になる。「かの子」伊勢清志への惜別の歌であり、訣別の歌である。後に『春のことぶれ』に収められた「夏のわかれ」十一首とは、おのずからその歌境が異なっている。

やはり、「海山のあひだ」は「鳥山」として深化拡大したと同時に、一つの訣別をもしたものであったのである。

注1 II・III・IVの「逈空集（海山のあひだ）」を以下に掲げておく（原文は旧漢字）。なお、別に八月五日の「逈空集」四首も引いておく。この四首もすべて『安乗帖』『ひとりして』の「第四部 うみやまのあひだ」に収録済み。

○「日刊『不二』」大正二年七月十日付

▲逈空集

海山のあひだ

逈空沙弥

たびごろもろくなり来ぬ、志摩のはて安乗の崎に、あかき灯の見ゆ

わたつみの豊はた雲と、あはれなる浮寝の昼の夢と、たゆたふ

闇にこゑしてあはれなり、志摩の海相差の迫門に盆の貝ふく

天つ日の光あはれにみだれたる山菅原に野木のかげひく

蝸のなける木の間のうすあかり、目いたく見つゝ、山をくだるも

那智に来ぬ、竹栢樟の古き夢、そよ、ひるがへし、風とよむなる

町のかど、木ぶねにおとす水の音、旅のねざめの耳にしたしき

沖さけて七日のふな路、しめり風野茨にふれて来と、かゞふかな

夕波に鳴がなげば、青岸のうへ行く馬車の、さびしかりけり

はたごやの二階より見る、長汀の闇夜に、白くひるがへる波

いり方がたの照てる日ひいざよひ、大杉おほすぎの七ななもとうかべ、霧きりながれ来きぬ

○「日刊『不二』」大正二年七月十七日付

▲てうくうしふ 迢空集

海山のあひだ

迢空沙弥

青海あそみにまかゞやく日ひや 遠々とそくし母ははが国くにへ 舟ふねかへるらし

北牟婁きたむろの奥おくの小村こむらに わく水みづのかなしき記憶きをきた来る 午後ごごかな

まがなしくにほひも来るか 雨うき気きさむく檜葉ひばの青葉あそばのたそがるゝ 山やま

山やまめぐり 二日ふつかひとみ人見みず あるくまの蟻ありの穴あなにも見みいりつゝ泣なく

波なみゆたにあそべり 牟婁むろの磯いそに來きてたゆたふ命いのちしばしやすらふ

佐陀谷さだにに生徒せいとふたり二人ふたりと行きゆく

ほの白しろう子こらが頼見ほみゆれ 夕月ゆづくよしづく夜よ霏ふおち來くる峽かきに草くさしく

さをなるかげおとす木きによりかゝり われらは今日けふの行ゆきくれを いふ

やゝほそりて 子こらが見みゆるにいとかなし わが若わかき日ひのまのあたりして

ゐろりに楢ほたさしかこみ はかな顔がほしてうちもだし 子こらがむかへる

○「日刊『不二』」大正二年八月三日付

▲てうくうしふ 迢空集

迢空沙弥

海山のあひだ

胸むなひろにかきはたけたる子こらが服ふくすきて脈みやくうつ楸ほたのあかりに

爐火ろくわあかしはかなき夢ゆめにゑめる顔かほ二ふたつ前まへにしさしくまれ つゝ

加茂助谷かもすけだにきこりごや樵夫せうぶ小屋こや

ねむる子の眉のあたりにたゞよひし夢よりさめてやすく粟はむ
 山あるき幾日の後よたそがるゝ町のあかりにほけてたゞずむ
 わが乗るや天の鳥船海ざかの空拍つ濤に高くあがれる

○「日刊『不二』」大正二年八月五日付

▲逈空集

撥おとのすこしみだれて胸いたき音をひく夜の船宿の三味
 よらで行く矢の港なつかしく夜汐のうへにゆらぐともし火
 風ぐもりすはや昏がりましくらに海はせ来るみたらをの駒
 杉檜たてるはざまのかたあかりさし来る方に鳥なくさびし

注2 VI・VIIの「海山のあひだ」のうち、Iに未収録の歌を掲げておく。

○「國學院雜誌」第二十一卷第六号、大正四年六月発行

海山のあひだ

釈 逈空

闇に声してあはれなり 志摩の海相差の迫門に 盆の貝吹く
 町のかど 木ぶねにおとす水の音 旅のねざめの耳に したしき
 にはかにも この日は昏れぬ 高山のほき路 風ふき 鶯のなく
 名も知らぬ古き港へ はしけしていにけむ人の 忘れぬかな
 奥牟婁の山 くもり日の濡れ色に青みて寥し 蛸のなく
 舟に見る漁村の畠に たそがれし青菜の色の 目にしめるかな
 身をけづるこのわづらひは 誰知らむ 旅籠の暮に 夕顔をきる

なごみ心地旅にえてけり 髪かれば 日かげものに 膝に落ち来て
青山に 夕日まぎ／＼照る頃や 入り江の町の かなし あらはに
はたごやの廂をぐらく そよぎるし乾し菜のかげをおもふ 夕やけ

○「國學院雜誌」第二十一卷第七号、大正四年七月発行

海山のあいだマ(二)

釈 迢空

かたし国 木の長島に 船が／＼りして とふ巫女のくちの かなしさ
天づたふ日の昏れ行けば わだの原 蒼然として 深き風ふく
高山のかげりかなしみ たそがれて蝸マメマシなげく 斑鳩マメマシなく
二木ニキの海 追門のふなのり わだつみの入日の濤に 涙おとさむ
ものかふと入りたつ軒に うす日さす 奥ぐまのなる小城下の 昼
山路来て 孤村の辻にたゞずめる子らをかなしみ ぜにあたへすぐ
つまづきの石はる／＼と 谷に行く 耳をことして 夕陽に立つ
ほろ／＼と散るがかなしき色なりし 志摩の横野の 空色の花
ゆふだちにうたれて 一葉 野木のすゑ 青葉おとすに わが目あやぶし
なその鳥 つらねてさむし しら／＼と 磯の暗夜の目を ながれすぐ
千鳥なく あゝ古き日のはての夜の あはれぞ 胸によみがへり来る
雨にゆく旅のあはれをうちそゝり 鄙うた聞ゆ 芥子とぶ風に
道づれとなれるわかうど そが一人 口ぶえふくが悲しき 山路
ふる／＼と笛ふきなげき 青びれてうたふは 旅のあはれなるふし

のびはてたる松のみどりの 香に高き山ふところの 熱砂をわたる
 もとつびと 山に葛ほり 山人と老ゆべき世ぞと わび来しものを
 つふら石つぶくならぶ みくまのゝ山家の屋根にさせる うす月
 雨に散る柳の葉あり 秋近き日ざしかげろふ熊野川原に
 藪原に むくげの花の咲きたるも よそ目かなしき色と見て すぐ
 岩にゐてわが道さしぬ 安乗りの児 おないどしとも見えて 四五人
 淡くしむ梨の香かなし 黒檜山つき立つ方か 山鳩のなく

注3 私家版自筆歌集『うみやまのあひだ』は、友人の安藤英方に贈ったもので、歌は緑色のインクで書かれている。収録歌数は二〇二首。その成立は大正四年夏以前と推定される。なお、昭和三十九年一月十日、明治書院から原色写真版で複製本が公刊され、本稿もそれを使用。

注4 『海山のあひだ——南九州の旅に』三八首（『國學院雑誌』第二十六巻第五号、大正九年五月発行）の収録歌については、和歌文学大系30『海やまのあひだ』（校注、長谷川。平成十七年三月二十五日、明治書院刊）に付した歌番号を記しておく。なお、歌集未収録歌二首については、連作の三六・三七首目であるが、そのまま掲げることとした。270・269・268・285・305・286・287・288・299・300・289・408・290・291・292・405・407・303・298・297・283・277・278・301・302・275・276・284・282・274・304・409・296・267・406・次の2首・404。

船の底に目ざめて聴けば 心いたし。起き居て子どももの嘔くらしも（初出）

船の底、夕さり早く わかち来るくさき飯はむ。孤ごころに（「山および海」大正六年十一月、初出）

注5 『海山のあひだ』二二首（「日光」第一巻第七号、大正十三年十月発行）の収録歌については、和歌文学大系30『海やまのあひだ』に付された歌番号を記しておく。「奥熊野」は、3・2・4・5・9・11・12・次の歌／29・30・31。

虚耳をさびしみにけり。沢深く 人來たる杖の音を聞きつゝ（初出）

「蟹の村 老岐」は、16・17・18・19・20・21・22・24・25／詞書風の「ゆくりなく」・15。

注6 『安乗帖』の前書きには、「大正五のおもひの年 志摩より熊野路の旅にのぼる 八月の十三日より廿五日まで その間十三日 従ひたるもの伊勢清志・上道清一」とある。なお、「アララギ」第九卷第十号（大正五年十一月発行）に掲載された「異郷意識の進展」にも、「数年前、熊野に旅して、真昼の海に突き出た大王ヶ崎の尺端に立つた時、私はその波路の果に、わが魂のふるさがあるのではなからうか、といふ心地が募つて来て堪へられなかつた。これを、単なる詩人的の感傷と思はれたくはない。これはあたるむから来た、のすたるぢい（懐郷）であつたのだと信じてゐる」（『新全集』第二〇卷一三三ページ）と、この旅のことに言及している。

注7 「国文学」第二十二卷第七号（昭和五十二年六月発行、学燈社）に発表した「『海やまのあひだ』論」を皮切りに、近くは和歌文学大系30『海やまのあひだ』の「解説」においても言及している。

注8 現代短歌全集第十三卷『古泉千樞集・釈迢空集・石原純集』（昭和五年九月三日、改造社刊）の「追ひ書き」である。『新全集』第三二卷三三三ページ。

注9 第二節で掲げた「海山のあひだ」の表題ではXにおいて、「奥熊野」の連作名（「日光」大将十三年十月発行）がXIの第一歌集『海やまのあひだ』（初版本）になると、「鳥山」の表題に改められている。折口の「鳥山」については、早くに池田彌三郎氏の言及がある。

注10 加藤守雄「折口信夫の方法」（弘文堂版民俗文学講座『日本文学と民俗』所収、昭和三十五年八月刊行）。そこには、「一 詩人的ということ」「二 論理の開発」「三 実感」「四 古代研究」という章立てで論じられており、現在でもすぐれた折口学の論と言える。

注11 すでに池田彌三郎氏が『まれびとの座』（中公文庫版九七ページ）で指摘されているが、昭和三年に発表された「翁の発生」には、「二 夏、沖繩諸島を廻つて得た、実感の学問としての成績は、翁成立の暗示でした」（『新全集』第二卷三五〇ページ）とあり、「我々の研究法は、経験を基調としたものであります。資料の採訪も、書齋の抜き書きも、皆、伝承の含む、ある昔の実感を誘ふ為に過ぎません。実感による人類史学と言ふべきものなのです」（同、三五三ページ）と〈実感〉の学の在りようを自身説いている。

注12 長谷川「解説・折口信夫研究」（角川文庫版『古代研究VI』国文学篇2の解説、昭和五十二年十月十五日刊行）、同「第5章 短歌本質成立の時代——叙景詩の価値の発見」の中の「〈生活〉の重視の意味——折口学の方法と構造」（『折口信夫 孤高の詩人学者』所収、昭和五十四年十二月二十五日、有斐閣新書）、同「折口信夫の〈学〉の構造」（『折口信夫を〈読む〉』所収、昭和五十六年十二月十五日、現代企

画室刊)、同「『海やまのあひだ』解説」の「六 (生活) 重視の思想から」(和歌文学大系30『海やまのあひだ』所収、平成十七年三月二十五日、明治書院刊)など。

注13 『新全集』第一卷三〇七ページ。

注14 この論文について、池田彌三郎氏は、「万葉びとの理想の生活様式を具現した人として、おおくにぬしを中心に考察してある。従ってこの論文は、おおくにぬしの研究と呼んでもいい」(中公文庫版『まればとの座』九四ページ)と述べている。

注15 「此信仰の替り目に順応する事の出来なかつた地方では、段々「神々の死」がはじまつて来た。さうした神々のむくろを護りながら他郷に対しては、一つの新神があると言ふ威力を利用して、本質を脱け出す者が、後から／＼と出た」(『古代研究』国文学篇所収「国文学の発生(第二稿)」、『新全集』第一卷一一〇ページ)とある。

注16 他に「日本人の幽霊ゴーストたる短歌」(「短歌小論」昭和九年一月発表、『新全集』第二十九卷二〇八ページ)や、「何しろ歌は、日本人のためのごうすとである」(「短歌啓蒙」昭和九年九月発表、『新全集』第三十一卷三四四ページ)や、「短歌といふものは、日本人につきまとつてゐる怨霊といふやうなものである」(「短歌の運命——若き人々に訴ふ——」昭和二十四年三月発表、『新全集』第二十九卷三九六ページ)などがある。

注17 この番号は、和歌文学大系30『海やまのあひだ』(明治書院刊)に付した歌番号である。

注18 注10に同じ。

注19 持田叙子「釈迢空『安乗帖』と田山花袋『南船北馬』」(『折口信夫独身漂流』所収、平成十一年一月刊、人文書院)。

〔付記〕本稿は、平成十七年(二〇〇五)十月一日(土)の慶應義塾大学文学部国文学研究室主催「折口信夫・池田彌三郎記念講演会」における同表題での講演を骨子とする。なお、本稿を序章とした続編は、「折口学の相貌——表題『海やまのあひだ』の展開——」の題目で執筆する予定である。

**Reading Tyoku-Syaku's "Umiyama no aida" : His poetic creation and
research work.**

In this paper we examine the process of formation of titles in Tyoku-Syaku's tanka collection "Umiyama no aida". The poet Tyoku-Syaku was a famous researcher of literary and folkloric subjects known as Sinobu Or iguti. In this research paper we elucidate how deeply Or iguti's research work and Tyoku-syaku's poetic creation are interrelated.